

県営圃場整備事業（伊那市手良地区）

—緊急発掘調査報告書—

# 堂 垣 外 遺 跡

1987

伊那市教育委員会  
上伊那地方事務所

県営圃場整備事業（伊那市手良地区）

—緊急発掘調査報告書—

# 堂 垣 外 遺 跡

1987

伊那市教育委員会  
上伊那地方事務所



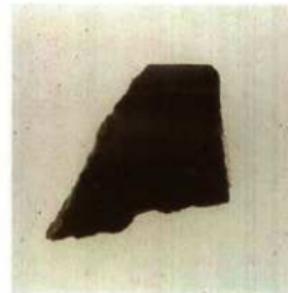
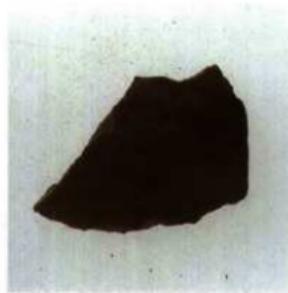
遺構配置全景



室町初期古瀬戸灰釉把手付水差し出土状況



室町初期古瀬戸灰釉把手付水差し



1

2

3



4

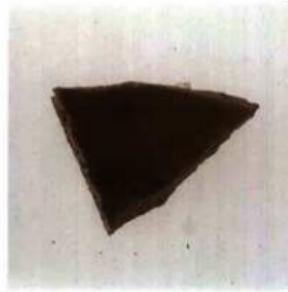


5

6



7



8

9



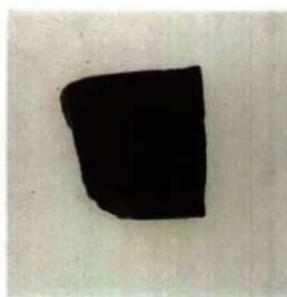
10



11



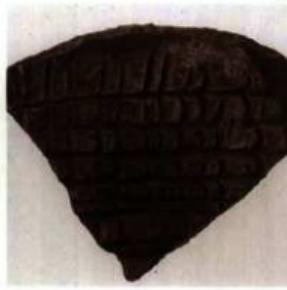
12



13

14

15



16

17

18



19

20

21



22

23

24



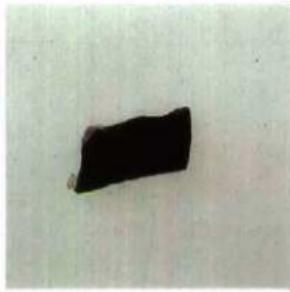
25



26



27



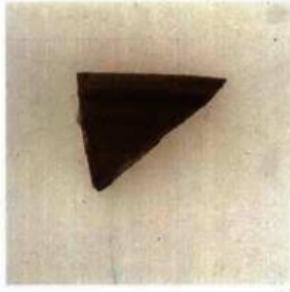
28



29



30



31



32



33



34



35



36

# 序

堂垣外遺跡付近を地元の人は島崎という小字名で呼んでいます。この付近一帯は水田地帯が多いために、圃場整備事業地区に該当しました。遺跡本来から考えてみると、現状保存が最もぞましい姿であります。世間の動きからして、それは不可能なために、発掘調査を実施して、記録保存という形をとって、後世に伝えることになったわけであります。

この調査は、昭和61年7月から昭和61年8月にかけて、団長に日本考古学協会会員友野良一氏をお願いして実施致しました。発掘調査を開始する以前はあまり期待が持てそうな遺跡ではないと考えておりましたが、発掘調査に着手してみると中世に関連した大事な遺跡であることが判明致しました。

調査の成果についてはこの報告書の通りであります。主なる成果を記してみると次のようになります。

室町期の住居址2軒、溝状遺構1基、掘立柱建物址1棟、中世初期から近世後期にかけての陶磁器、古銭。

最後に、この調査にあたり、御協力いただきました地元土地改良区役員の方々、上伊那地方事務所土地改良課職員一同、長野県教育委員会、地方作業員の方々に対し厚く御礼申し上げます。出土した遺物について鑑定していただいた瀬戸市歴史民俗資料館長宮石奈広氏に感謝の意を表します。

昭和62年3月

伊那市教育委員会

教育長 宮 下 安 人

## まえがき 堂垣外遺跡の環境

### 位置

堂垣外遺跡は、長野県伊那市手良野口大豊・大和両部落に所在する。遺跡地までの道順は次の二通りが考えられる。その一つとしては、伊那市街より杖突街道を6km程東へ行くと、美筒上原区の集落が密集している地帯に至る。上原・上大島両区の境界地付近で杖突街道を左折し、北へ向うと、すぐ左側に美筒小学校の白い校舎が見える。この学校の北側には三峰川右岸第2河岸段丘が東西に連なり、見事な段丘地形を展開している。この段丘崖面に造られた道路を登りつめると、眼前が大きく開けける。この一帯は通称「六道原」と呼ばれ、伊那市の一大水田地帯の一翼を担っている。末広区を通り、杖突街道と別れて2km程で手良中坪に至る。

中坪の中央部付近に八幡宮があり、ここを左折して西へ1km程行くと手良農協がある。この農協前の交差点には手良地区内では唯一の信号機が付いている。この交差点を右折して500m程東へ行くと、「東松入口」と言う伊那バスの停留所がある。この停留所の北、東一帯が堂垣外遺跡である。もう一つの道順は伊那市街地より天竜川を渡り竜東地区を北へ向って進むと、上牧・野底・福島の集落がある。福島集落の北はずれ地点では瀬沢川が天竜川に流れ込んでいる。瀬沢川を境にして北が箕輪町卯ノ木、南が福島であり、いわば行政区の境となっているかっこうである。箕輪町卯ノ木集落の南側を右折して、東へ行くとハツ手・下手良に至る。下手良地区は手良の中心地であり、伊那市役所手良支所・手良小学校・手良農協・手良郵便局・手良診療所・手良保育所等々各種の公共施設が棟を並べて建っている。この一角に前述した信号機のある交差点がある。その後のルートは先に述べた通りである。

### 地形・地質

堂垣外遺跡はかなり広範囲にわたって指定されている。今回調査を実施した地区は小字名を「島崎」と呼称している場所であった。

呼んで字の如く、舌状台地状に突き出した地形を呈し、台地上は厚いローム層に覆われていた。台地崖下は数mにも及ぶ砂が堆積して湿地帯を形成し、砂層の中に多くの埋れ木の存在が確認された。標高777m～780m位を測る。

### 周辺遺跡の歴史的環境

手良地区は伊那市の東部地区に属している。この地区の東側の山脈は高遠町に、北側の山脈と台地は箕輪町にそれぞれ接している。このような地形的位置に臨んでいるために、古くからの道筋が尾根沿いに発達している。

手良地区を代表する大河は棚沢川であり、この川に流れ込む小河川が隨所にみられ、複雑多岐にわたる地形景観を呈し、いわば谷間の桃源郷と言わざるをえない。

手良地区で現在確認されている遺跡は50ヶ所を越えようとしており、これらは次のような地形のところに割合に多く分布している。棚沢川を中心とした河岸段丘面に立地している遺跡群、山麓扇状地の扇頂と扇端に立地している遺跡群。手良地区内で縄文早期の遺跡として浜弓場遺跡、所謂遺跡、ワランベ遺跡、松太郎窪遺跡があげられる。

浜弓場遺跡は宅地造成をすることによって、昭和47年11月29日から12月19日にかけて伊那市教育委員会が中心となって緊急発掘調査を実施した。調査の結果、縄文早期焼石群3基、縄文中期竪穴住居址4軒、平安時代竪穴住居址2軒、中世の土壙1基であった。土器としては斜縄文、楕円押型文、山形文と楕円文の組み合わせたもの。田戸下層式、鶴ヶ島台系、茅山下層系、茅山上層系、花積式、開山式、黒浜式、五領ヶ台式、下小野式、井戸尻式、加曾利E式、土師器、須恵器、灰釉陶器、内耳土器。

縄文中期の遺跡としては所洞、辻垣外、地神原、宮の平、東松、鳴神、孤垣外、松太郎窪等々がみられる。野口狐畠地籍から縄文中期の炭化物が水田造成時に発見され、故那須野伍輔氏が採集し、保管していた。この発見を動機にして故伊沢幸平氏は栗蒂文化園論を展開した。これは、現在、考古学界で重要視されている照葉樹林文化論の草分けと言っても過言ではない。

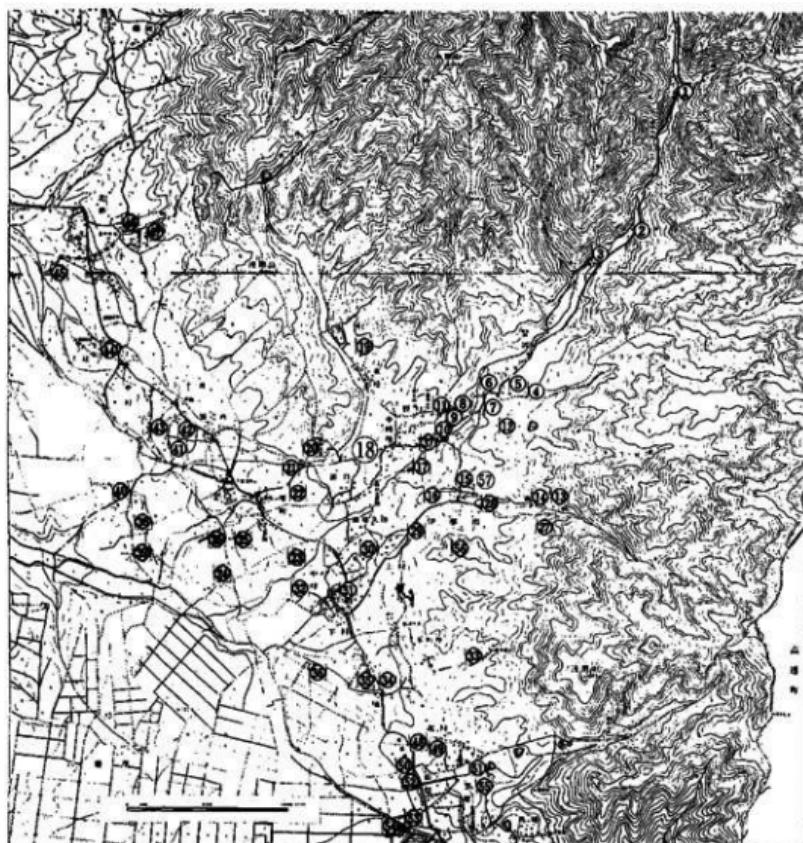
手良野口中組にある野口遺跡は縄文晚期の著明な遺跡の一つであり、その名は全国的に知れわたっている。縄文晚期の火葬人骨が出土したことによって、葬制を研究する者にとっては欠かすことのできぬ遺跡の一つとなっている。南垣外からは平安中期頃の灰釉陶器長頸瓶と人骨の出土が伝承されている。上伊那図書館南隣りの上伊那郷土館陳列ケースにはこれが展示され、庚申塚出土と記載されている。この庚申塚から福島の上の段にかけての広大な地域はかつての手良郷の所在地ではないかとの説が有力化しつつある。この郷の存在を実証できる奈良・平安時代の多くの遺物が出土し、そのうちでも特に福島遺跡は注目されている。

昭和52年度に中坪にある砂場遺跡の緊急発掘調査を実施した。その結果、弥生後期竪穴住居址2軒、古墳時代竪穴住居址2軒、平安時代竪穴住居址4軒の検出をみた。古墳としては矢塚、山伏塚の存在は二つとも破壊されてしまっております。石室に使用された大きな石が散在しているに過ぎない。

中世の遺跡としては城館跡の存在が知られている。浜弓場遺跡からは中世土壙の検出が報告書によつて報告されている。昭和60年度に発掘調査を実施した堤林遺跡からは永楽通宝、中世陶磁器片、島崎遺跡からは中世水溜め遺構、中世陶磁器片の出土がそれぞれあった。水溜め遺構の存在は近くに集落存在の可能性を濃厚にするものである。

近世の遺跡として上村遺跡があげられる。昭和54年度に緊急発掘調査を行い、寛永通宝6枚、人骨、キセルが出土した。6枚の古銭出土は6文銭の風習の一端をうかがい知ることが可能となつてゐる。

(飯塚政美)



地形および遺跡分布図

### 遺 跡 の 名 称

1 潤 山	10 矢 雪	19 東 松	28 小 西 清 毛	36 六 道 原	44 沢 島	52 林
2 ミキトギ	11 野 口 烟	20 古 八 帆	29 近 洞	37 野 口	45 福 島	53 曙
3 鰐沢桜林	12 金 山	21 錦治堀外	30 上 村	38 下 手 良 中	46 堤 林	54 士 屋
4 ワランベ	13 電 の 沢	22 中 原	31 宮 地 平	39 大 原	47 山 の	55 古 城
5 入 林	14 鳴 神	23 石 見 堂	32 砂 水 場	40 松 太 郎 堤	48 神 手	56 浜
6 大 上	15 山 伏 墳	24 二 十 平	33 清 水 洞	41 南 墓	49 向 烟	57 弓
7 堀 堤 外	16 丸 山	25 地 神 原	34 郊 の 坪	42 角 城	50 芦 原 堤	越 離 堤 敷 山 場
8 鳥 ノ 宮	17 向 田	26 小 荻 原	35 椿 の 木	43 堤 外	51 外 堤	
9 沢 堤 外	18 堤 外	27 大 百 清 毛		52 下		

## 凡 例

1. 今回の発掘調査は県営圃場整備事業に伴なう、土地改良事業で、第2次緊急発掘調査にもとづく報告書とする。
2. この調査は県営圃場整備事業に伴なう緊急発掘で、事業は上伊那地方事務所の委託により、伊那市教育委員会が発掘調査団を結成し、発掘調査団に事業を委託して、実施した。
3. 本調査は、昭和61年度中に業務を終了する義務があるため報告書は図版を主体とし、文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。
4. 本文執筆者は次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

### ◎図版作製者

- 遺構および地形 友野 良一 飯塚 政美
- 土器拓影 小木曾 清 飯塚 政美
- 石器実測図 小木曾 清 飯塚 政美
- 陶磁器実測図 小木曾 清 飯塚 政美
- 鉄製品実測図 小木曾 清 飯塚 政美
- 古錢拓影 小木曾 清 飯塚 政美

### ◎写真撮影

- 発掘及び遺構・遺物 友野 良一 飯塚 政美

5. 本報告書の編集は主として、伊那市教育委員会があった。
6. 遺物及び図面類は伊那市考古資料館に保管してある。

## 発掘調査の経過

### 発掘調査の経緯

手良地区の土地改良事業は昭和52年度に中坪地区で最初に着手致しました。この事業に伴なって砂場遺跡の発掘調査を実施致しました。昭和54年度には中坪上村部落の水田一帯が土地改良事業区内に含まれるとのこと、事業実施前に施工地区内に存在する上村遺跡の緊急発掘調査を行いました。昭和60年度事業地区内は手良ハツ手地区であり、この中には堤林・島崎両遺跡が含まれており、夏場に発掘調査を実施致しました。

昭和60年度団体営小規模排水対策特別事業を手良野口蟹沢地区で実施致しました。この中には蟹沢桜林・入林・ワランベの三遺跡が含まれており、夏場から初冬にかけて発掘調査を実施致しました。

昭和61年6月10日 上伊那地方事務所長と伊那市長との間で『埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書』を締結し、契約後、ただちに発掘準備にとりかかった。発掘調査に着手する前に伊那市教育委員会を中心にして堂垣外遺跡発掘調査会を結成し、この中に調査団を含めて業務を進行することとした。

昭和61年6月18日 発掘調査通知を提出する。

### 調査の組織

#### 堂垣外遺跡発掘調査会

##### 調査委員会

委員長 宮下 安人 伊那市教育委員会教育長

副委員長 北村 誠 伊那市文化財審議委員会委員長

委員 山口 豊 伊那市教育委員会委員長

調査事務局 村山 幸義 伊那市教育委員会教育次長

タ 蟹沢 典人 タ 社会教育課長

タ 矢沢 巧 タ 課長補佐

タ 宮原 強 タ 係長

タ 飯塚 政美 タ 主任

タ 高木いづみ タ 主事

##### 発掘調査団

団長 友野 良一 日本考古学协会会员

副団長 根津 清志 長野県考古学会会员

タ 則子柴泰正 タ

調査員 飯塚 政美 日本考古学协会会员  
・ 小木曾 清 宮田村考古学友の会会长

〔作業員名簿〕

酒井岩夫 三沢 寛 柴 佐一郎 大野田 英 埋橋程三 大野田三千代 酒井とし子 大久保  
富美子 白鳥桂介 伊藤 勝 蟹沢治江 伊藤菊次 上島正延 登内かず江 小松栄子 石倉昌  
子 小松克明 小池 崇 (敬称略・順不同)

堂 垣 外 遺 跡

## 目 次

目 次.....	( 3 )
挿図目次.....	( 4 )
図版目次.....	( 4 )
表 目 次.....	( 4 )
 第Ⅰ章 発掘日誌.....	( 5 )
 第Ⅱ章 遺 構.....	( 7 )
第1節 住居址.....	( 8 )
第2節 竪 穴.....	( 8 )
第3節 溝状遺構.....	( 9 )
第4節 堀立柱建物址.....	(10)
第5節 土 壤.....	(13)
 第Ⅲ章 遺 物.....	(13)
第1節 陶 磁 器.....	(13)
第2節 鉄 製 品.....	(15)
第3節 古 錢.....	(15)
第4節 土 器.....	(15)
第5節 石 器.....	(16)
 第Ⅳ章 ま と め.....	(18)

## 挿図目次

第1図 地形及び遺構配置図 .....	(7)
第2図 第1号住居址・第1号土壌実測図 .....	(8)
第3図 第1号竪穴実測図 .....	(9)
第4図 第1号溝状遺構実測図 .....	(10)
第5図 掘立柱建物址実測図 .....	(11)
第6図 陶磁器実測図 .....	(14)
第7図 鉄製品実測図 .....	(15)
第8図 古銭拓影 .....	(15)
第9図 土器拓影 .....	(16)
第10図 土器実測図 .....	(16)
第11図 石器実測図 .....	(16)
第12図 石器実測図 .....	(17)

## 図版目次

図版1 遺跡遠景
図版2 遠構
図版3 遺構
図版4 遺構
図版5 遺構
図版6 遺出出土状況
図版7 遺物出土状況

## 表目次

第1表 出土陶磁器一覧表 .....	(13)
--------------------	------

## 第一章 発掘日誌

昭和61年6月27日 晴 伊那市考古資料館にて道具の整備をする。

昭和61年6月28日 晴 伊那市考古資料館にて道具の整備をする。

昭和61年7月4日 晴 伊那市考古資料館から道具を現場へ運搬し、テントを2張り建てる。

昭和61年7月8日 晴時

々曇 テントの中とテントの周囲を整理・整頓をし、道具の入れかたを容易にできるようにする。

昭和61年7月12日 曇時

々雨 分布調査的なグリット掘りを開始する。中・近世陶器片が若干出土する。

昭和61年7月14日 晴時

々曇 分布調査的にグリット掘りを実施する。わずか



発掘風景

に、中・近世の陶磁器片が

出土。グリットを設定する。南から北へA～R、西から東へ1～8とし、一辺を2m×2mとする。グリット設定区の中央付近に方形状の落ち込みがみられ、プラン確認につとめ、これを第1号竪穴とする。

昭和61年7月17日 曇時々晴 草刈りを実施する。グリット掘りを実施する。第1号竪穴のプラン確認をほぼ終了する。それによると方形のプランで、柱穴が壁外にみられた。掘り下げて行くと室町期の陶器片と古銭（成平元宝）が出土した。

昭和61年7月18日 晴時々曇 グリット掘りを実施する。本日は久しぶりに晴れた一日であった。夕方までかかって第1号竪穴の完掘をほぼ終了する。この竪穴内からは他に古銭3枚が出土した。うち1枚は洪武通宝で、この竪穴の年代がある程度判別できた。火打金の出土。竪穴の南側へ溝状の落ち込みがあり、この確認につとめる。

昭和61年7月19日 曙時々晴 昨日検出された溝状遺構のプラン確認につとめる。

昭和61年7月21日 曙時々晴 溝状遺構のプラン確認につとめる。この遺構は西側へ行くに従って、幅が広く、溝底がやや深くなっている。この遺構は水田の中央部付近で落ち込みがなくなってしまう。水田造成時に破壊されたとみられる。中世によくみられる井筋の遺構ではないか。溝の一部分を掘り回めていくと、底面近くに配石がみられ、このレベルより摺鉢片と青磁片が出土した。第1号竪穴の南側、溝状遺構の周囲を拡張していくと掘立柱群の存在が明らかとなってきた。

昭和61年7月23日 晴時々曇・雨 第1号竪穴の西側を拡張していくと、竪穴状の落ち込みがみ

られ、これを第1号住居址とする。壁高は浅く、わずかに10cm位であった。床面はかたく叩いてあり、見事な光沢を放っていた。第1号竪穴、溝状遺構の完掘を終える。

昭和61年7月25日 晴  
梅雨晴け宣言は出ないが、  
これに近い天気状況であっ  
た。第1号住居址の完掘を  
終える。掘立柱が西側へと  
広がっている。

昭和61年7月26日 晴  
掘立柱群の拡張を東西南北  
にわたって実施していく。  
遺物の出土は少なかった。  
角状の柱穴も何カ所か発見  
された。ところどころに焼  
土や木炭の検出が認められ  
た。土壤の検出が1カ所あった。

昭和61年7月28日 晴 掘立柱群の範囲がほぼ把握できた。夕方までかかってこれらの完掘を終  
える。土壤の完掘も終える。

昭和61年7月19日 晴 第1号竪穴、第1号住居址、溝状遺構、掘立柱群、土壤の清掃を実施し、  
写真撮影をする。

昭和61年7月30日 晴 第1号竪穴、第1号住居址の平面及び断面実測を終了する。土壤の平面  
及び断面実測を終了する。

昭和61年8月1日 晴 溝状遺構の東壁と北壁の断面実測終了。溝状遺構の平面及び掘立建物址  
のプラン及びレベル測量を済せる。

昭和61年12月～昭和62年2月 図面の整理、原稿執筆、報告書の編集、それを印刷所へ送り込む。  
校正を行う。

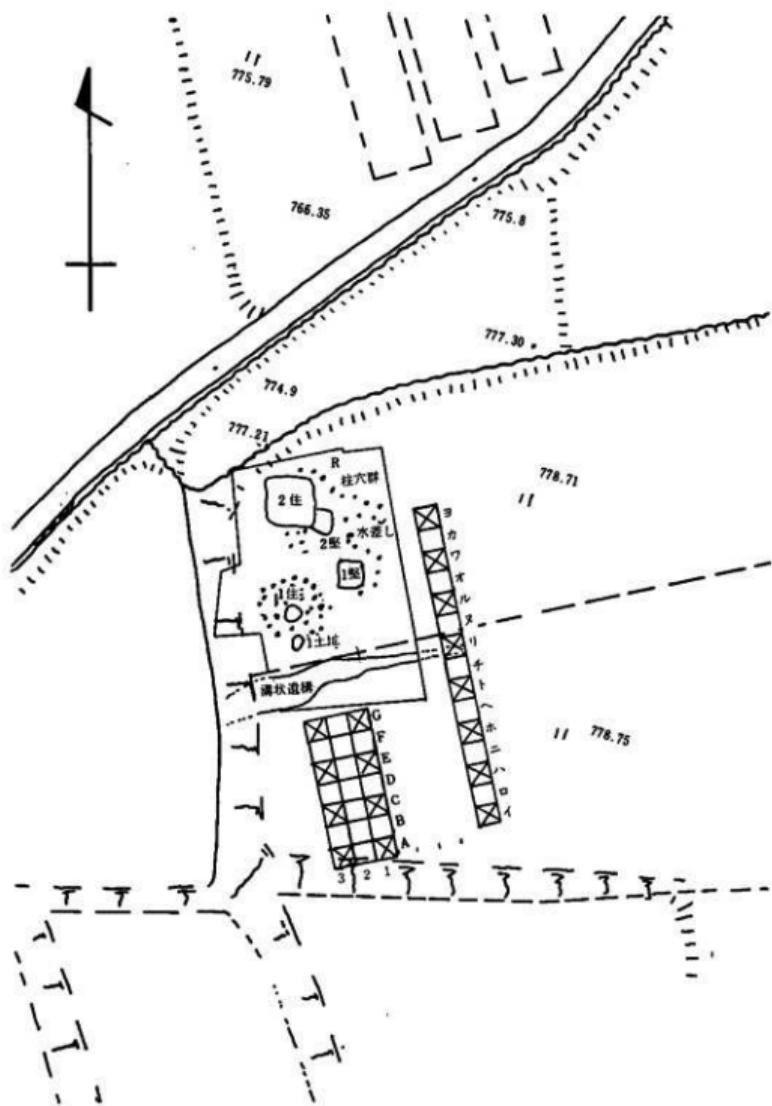
昭和62年3月 報告書を刊行する。

(飯塚政美)



第1号溝状遺構発掘風景

## 第Ⅱ章 遺構



第1図 地形及び遺構配置図 (1:500)

## 第1節 住居址

### 第1号住居址（第2図、図版3）

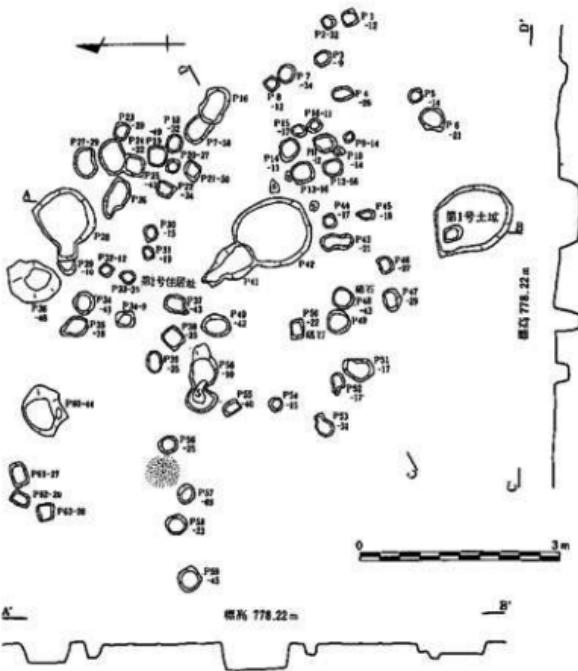
本住居址は南側で第1号土壇、溝状遺構、東側で第1号竪穴に近接して発見された。表土面より80cm位下ったソフトローム層上面に遺構検出面が存在し、単なる掘り込みのない掘立柱式住居址であった。第2図に明示したように数多くの柱穴が存在し、この柱穴の存在している範囲は極めて堅く踏みかためられ、一見するに床面の様態を呈していた。

床面の堅い所はまちまちであり、従って住居址の明瞭なる規模の把握はできなかつた。

西側によつたソフトローム層上面に直径30cm位で、多量の焼土が赤々と鮮明な色を放つて堆積していた。これは中世の住居址によくみられる地床炉の一類であろう。

地床炉の上に火かけ用の枠を組み、その上に鍋を懸けて、日常生活炊事をしたことは想像に難くない。この付近に杭用の小ピットの存在がない点からみて、鉄鍋を利用したとも想像でき得よう。

床面上から中世砥石及び室町後期の古瀬戸灰釉仏花瓶胸器片の出土があった。従つて、室町終末期の掘立柱式住居址と判明するのである。



第2図 第1号住居址・第1号土壇実測図

## 第2節 竪　穴

### 第1号竪穴（第3図、図版3）

本竪穴は溝状遺構の北側、第1号住居址に近接して検出され、南北2m20cm、東西2m35cm位を

測定できる。

ソフトローム層面を掘り込み隅丸方形状の平面プランを呈す掘り込み面の組成土は上部から中部にかけてはソフトローム層中部から下部及び底面はハードローム層より成り立っていた。

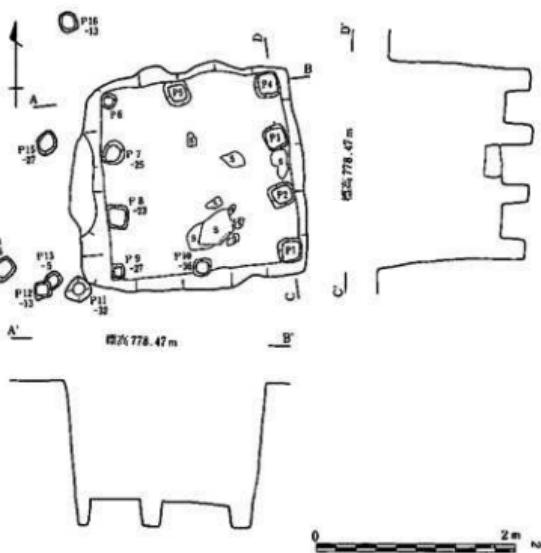
壁の状態は全般に垂直に近くになっており、部分的にみると南壁と西壁にやや凹凸があった。壁高は1m20cm位を測定できた。

床面はほぼ平坦で、やや硬く叩いてあり、砂質層面に構築してあった。また、同面上には一抱えから拳大程の花崗岩や变成岩が散在し、表面が焼けて赤く変色したり、炭化物の付着しているもの認められた。

東壁直下の床面と、西壁直下の床面にはほぼ等間隔に4本の角状の柱穴を、南壁直下の床面と、北壁直下の床面にはほぼ等間隔に3本の角状の柱穴が穿けられていた。床面上に存在した角状の柱穴は10本であった。

壁外の柱穴は西側だけに集中していた。覆土中には多量の炭化物と焼土が検出され、炭化物の中には穀粒状のものも認められた。

遺物としては咸平元宝、天聖元宝、洪武通宝の古銭類と、火打金、室町後期古瀬戸灰釉平茶碗、室町後期古瀬戸灰釉水注、室町後期古瀬戸鉄釉鉢、室町後期古瀬戸天目茶碗、室町後期鉄釉鉢が出土。よって本遺構は室町後期に位置づけられよう。



第3図 第1号竪穴実測図

### 第3節 溝状遺構

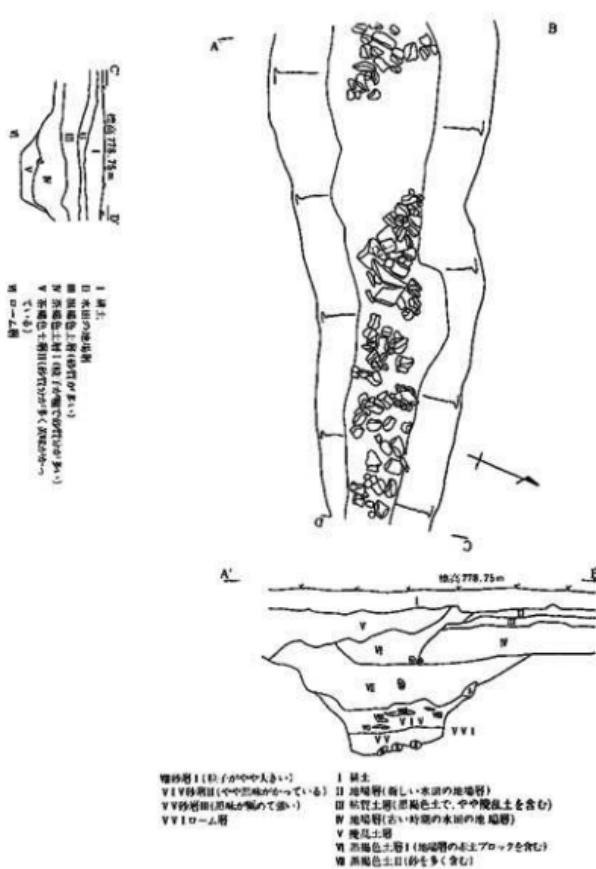
#### 第1号溝状遺構 (図版4～5)

本遺構は今回発掘調査して検出された遺構の中で最南端部に位置している。溝状遺構は東から西へやや傾斜しながら掘られている。従って西側の掘り込み面までは表土面から1m位あり、東側のそれは70cm位であった。

ソフトローム層面を掘り込んで構築してあり、ところどころで屈曲している。西側は3m位の幅を、東側は1m35cm位の幅を有している。深さは前述したような形態であるために西側が深くて約1m20cm、東側が浅くて60cm位を掘り込んである。

全般的には壁面はゆるやかな薬研状を呈し、その組成土は上面はソフトローム層、中部から下部にかけてはハードローム層より成り立っていた。底面には大きな凹凸があり、水が流れた時によどみ状になっていたと推測される。このよどみ状には多量の砂が堆積していた。底面のところどころに、硬砂岩、花崗岩、緑泥岩、粘板岩が集中的に敷いてあり、それのレベルはほぼ一定であった。石の大きさは大小様々で、焼けて赤く変色したのとか、黒々と炭化物の付着していたのもあった。

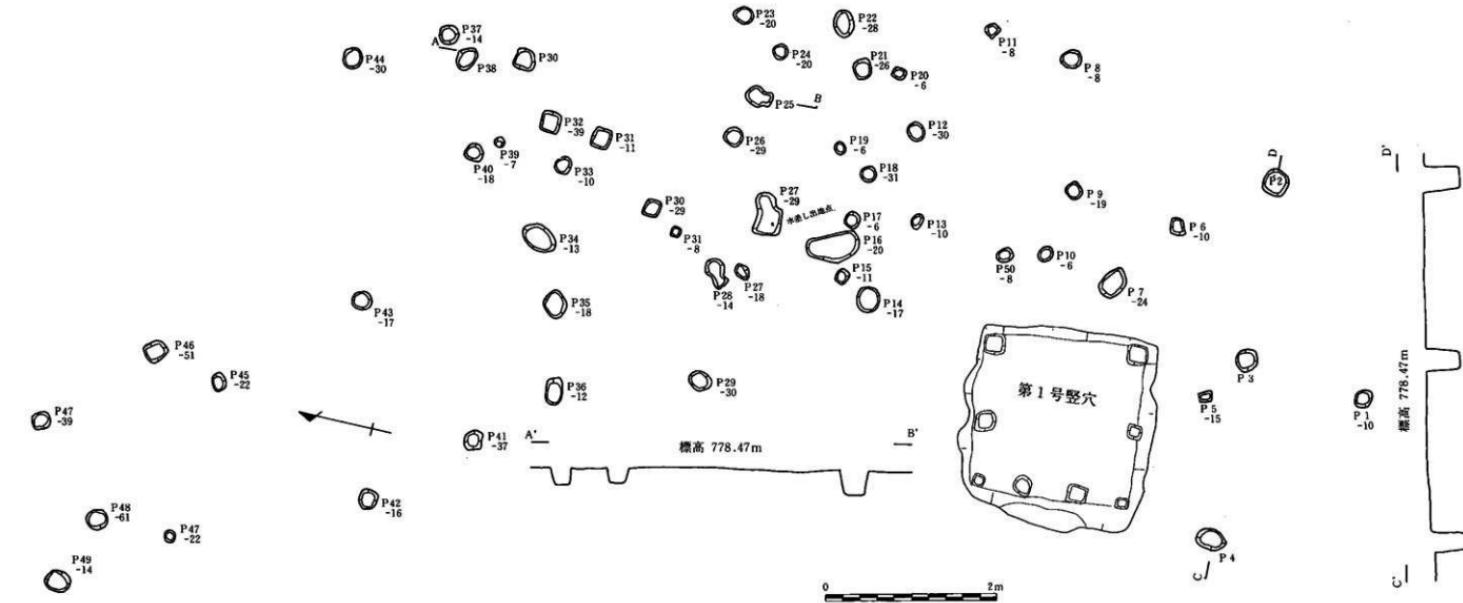
遺物は青磁片、内耳土器片、皇宋通宝が出土地。本造構は館を取り囲く、堀を兼備した溝と推測される。



第4図 第1号溝状造構実測図 (1:80)

#### 第4節 据立柱建物址 (第5図、図版2~3)

本造構は第1号竪穴の東側に発見された建物址であり、その大きさは様々な状態である。角状や円形状、橢円形が主体を成しておる。検出面のレベルがほぼ同一であるために、その配列を定型化することは極めて至難の業と言わざるを得ない。全般的にみて、5棟~6棟の建物の存在が考えられるが、その一つ、一つの規模等は不明確と言わざるを得ない。室町初期古瀬戸灰釉水差し出土。



第5図 据立柱建物址実測図



## 第5節 土 壤

### 第1号土壌 (第2図、図版5)

本土壌の南側には第1号溝状遺構、北側には第1号住居址にはさまれたかっこで検出された。南北75cm、東西65cm位の規模で、長円形状を呈す。壁高は10cm位を測り、やや外傾し、軟弱であった。床面はやや凹凸があり、ややかくなっていた。遺物は何も出土しなかった。

## 第Ⅲ章 遺 物

### 第1節 陶 磁 器

今回の調査で出土した陶磁器類は約80点で、数点を除いて他は断欠品であった。陶磁器の生産地をみてみると、古瀬戸を含めた瀬戸系が約80%を占めている。他には美濃系、有田系、唐津系、あるいは中国産系等が含まれていた。出土した陶磁器の内で陶器類が全体の90%位を成し、残りの約10%が磁器系であった。時代的にみてみると中世陶磁器類、近世陶磁器類とが約半々であった。器形からみてみると、日常食器類(雜器類)が主体を占め、その他、祭祀用具、茶道用具、仏事用具等が含まれていた。いづれにしても生活の舞台があったことを推測させてくれるのに好資料である。

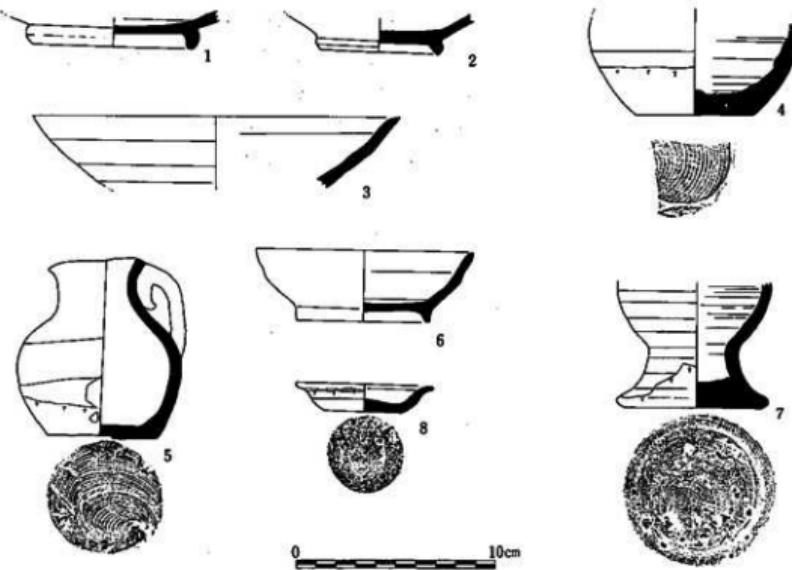
口絵(1)及び第6図(5)で掲載したのは掘立柱建物址の一柱穴より出土した室町初期頃の古瀬戸灰釉把手付水差しの完型品である。出土地点については第5図掘立柱建物址実測図に明示している。器高8.5cm、口縁径5cm、底径5.5cmを測る。底部は糸切り底を成している。

その他の説明については下の第1表を口絵(1~4)のカラー写真及び第6図陶磁器実測図を参照にして下さい。

第1表 出土陶磁器一覧表

口絵	番号	名称・器型	部分	厚さ(%)	出土場所	製作時代	備考
2	1	古瀬戸灰釉仏花瓶	底部	6	第1号住居址	室町終末期	
*	7	古瀬戸灰釉平茶碗	口縁部	5	第1号竪穴	室町後期	第6図(3)
*	8	古瀬戸灰釉平茶碗	底部	6	タ	タ	(7)と同一個体
*	9	古瀬戸灰釉平茶碗	胴部	5	タ	タ	
*	10	古瀬戸灰釉水注	底部	10	タ	タ	第6図(4)
*	11	古瀬戸鉄釉擂鉢	口縁部	6	タ	タ	
*	12	古瀬戸天目茶碗	底部	6	タ	タ	
3	13	古瀬戸鉄釉鉢	タ	5	タ	タ	
*	14	中国青磁碗	口縁部	タ	溝状遺構	宋	第6図(6)
*	15	中国青磁碗	胴部	タ	タ	タ	
*	16	古瀬戸天目茶碗	底部	6	タ	室町終末期	

図版	番号	名 称・器 型	部 分	厚 さ(%)	出 土 場 所	製 作 時 代	備 考
3	17	古瀬戸灰釉おろし皿	底 部	8	溝 状 造 構	室町終末期	
♦	18	古瀬戸灰釉尊式仏花器	♦	5	グ リ ッ ト	♦	第6図(7)
♦	19	古瀬戸灰釉小皿	♦	♦	♦	♦	第6図(8)
♦	20	古瀬戸灰釉尊式仏花器	胴 部	6	♦	♦	
♦	21	瀬戸御深井皿	底 部	7	♦	18世紀前半	
♦	22	瀬戸御深井両付	♦	6	♦	17世紀前半	
♦	23	古瀬戸灰釉おろし皿	口縁部	5	♦	室町終末期	
♦	24	瀬戸御深井湯呑	底 部	♦	♦	18世紀前半	
4	25	瀬戸天目茶碗	♦	6	♦	17世紀前半	
♦	26	古瀬戸灰釉平茶碗	胴 部	5	♦	室町後期	
♦	27	古瀬戸綠釉皿	口縁部	♦	♦	♦	
♦	28	中国青磁碗	胴 部	♦	♦	宋	
♦	29	古瀬戸灰釉平茶碗	♦	6	♦	室町後期	
♦	30	美濃筆洗皿	底 部	5	♦	19世紀	
♦	31	古瀬戸灰釉壺	口縁部	4	♦	室町後期	
♦	32	瀬戸鉄釉摺鉢	♦	6	♦	19世紀	
♦	33	唐津鉄釉小皿	♦	4	♦	18世紀	
♦	34	美濃墨絵皿	底 部	6	♦	♦	
♦	35	瀬戸丸型湯呑	口縁部	4	♦	19世紀 磁器	
♦	36	有田型湯呑	♦	♦	♦	♦	♦



第6図 陶磁器実測図

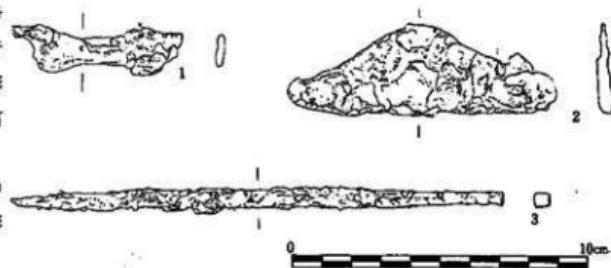
## 第2節 鉄 製 品 (第7図)

鉄製品は残片も含めれば相当量出土したが、実測できそうなのは第7図に掲載した3点だけであった。

第7図(1)は第1号  
竪穴の出土。腐蝕の進行  
が頭蓋であるので、原形  
態は不明であるが、角釘  
のように想定される。

(2)は第1号竪穴の  
出土。全体的には三角形  
状を呈し、上部は丸く、  
下部はほぼ直線状を呈し  
ている。腐蝕の進行度は  
少ない。火打金の一種であろう。

(3)は掘立柱建物址より出土、腐蝕の進行は少なく、割合に原形を留めている。断面が方形か  
らみて、また先端が尖がっていることからみて、何か工具的な用途を有した鉄製品であろう。



第7図 鉄製品実測図

## 第3節 古 錢 (第8図)

第8図(1)は  
第1号竪穴から出  
土した咸平元宝で、  
中国北宋時代998  
年から1003年に鑄  
造されている。



第8図 古 錢 拓 影 (1:1)

(2)は第1号竪穴から出土した天聖元宝で、中国北宋時代1023年に鑄造されている。(3)は第1  
号竪穴から出土した洪武通宝で、中国明初代洪武帝の時、1368年に鑄造されている。(4)は第1号  
溝状造構から出土した皇宋通宝で、中国北宋時代1039年に鑄造されている。

## 第4節 土 器 (第9~10図)

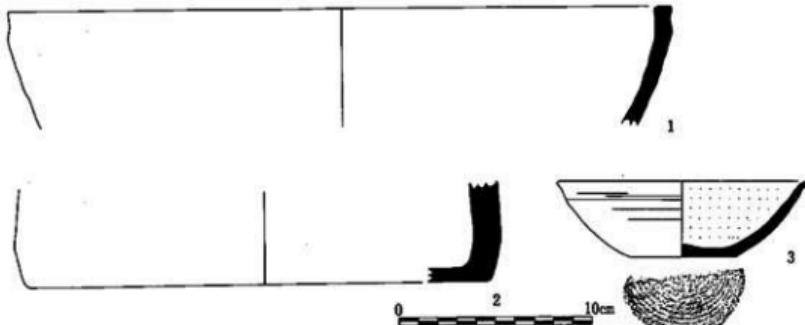
第9図の(1~2)は表面採集によって得られた土器片である。(1)の破片上部には縄文、中部  
には幅広ろで、低い隆帯が横位につけられ、その上に縄文を意匠してある。赤褐色を呈し、少量の  
長石、雲母を含み、焼成は中位である。縄文中期中葉の勝坂期の土器片である。

(2) は破片の外面全体にわたって狭い沈線が無雜作に垂下している。赤褐色を呈し、焼成は普通で、多量の長石、雲母を含む。繩文中期の加曾利E期である。

第10図 (1~2) は内耳土器片である。(1) は表面採集、(2) は第1号溝状造構より出土している。(1) は口縁径34.2 cm、(2) は底部径33.8 cmを計る。



第9図 土器拓影



第10図 土器実測図

(3) は土師器内黒の杯である。底部は糸切り底となっており、丁寧に作り上げられている。グリットより出土。奈良時代終末期のものと思われる。

## 第5節 石 器 (第11~12図)

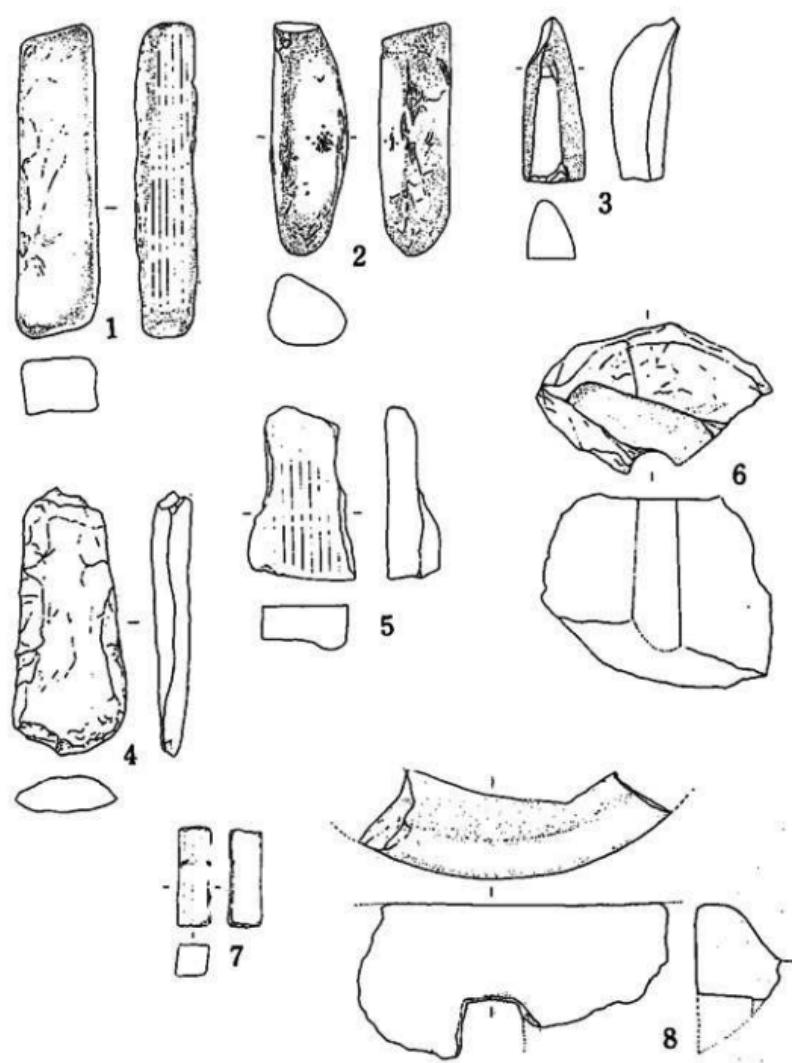
第11図 (1~2) は黒耀石製の石鎌である。双方ともグリット内より出土。(1) は抉ぐりが少なく、二等辺三角形に近い。左右対称形の定形的な石鎌である。精緻な二次加工が全面に加えられている。(2) はやや厚めで、二次加工の荒い石鎌である。脚を作り出した痕跡は全く認められず完全に三角形鎌の一類であろう。(3) は小豆大程の石英質の丸石を丁寧に磨き上げて作成してある。磨き方は石の全面にわたって及んでいる。大きさ及び全体の形態からみて基石に使用したのであろう。



第11図 石器実測図(1:2)

第12図 (1~3), 5, 7 は砥石である。(1~2) は第1号住居址、(3) は第1号竪穴、(5, 7) はグリット内より出土した。(1~3), (5) は砂岩製の石、(7) は油性の石を用いている。(1~3) は荒研、(5) は中研、(7) は仕上研である。(7) は腰に付けた携帯用と思われる。(4) は短筒形に近い打製石斧である。グリット内より出土し、調整は丁寧である。硬砂岩を用いており、形態からみて繩文中期のものである。(6, 8) はグリット内から出土した安山岩製の石臼であり、双方とも大部分欠損している。(6) は重ね臼の下の方で心棒の痕跡が、(8) は重ね臼の上の方で側面に回転用の杭を差し込む穴の跡がそれぞれ認められる。

(飯塚政美)



第12図 石器実測図

## 第Ⅳ章 まとめ

昭和61年度県営圃場整備事業（手良地区）が手良野口地籍で実施されるに当り、当地区内に存在する堂垣外遺跡の緊急発掘調査が実施されたわけであるが、中世から近世の遺構・遺物が検出され、整理に時間を費やし、また、研究を要する問題及び、極めて困難な点が多く含まれているので、発掘調査より知り得た問題点を記し、論を進めていきたいと思う。

### 縄文時代の遺物

縄文時代の土器は2片出土。そのうち1片は勝坂式、1方は加曾利式であった。縄文中期の黒耀石製の石鏡2点、縄文中期硬砂岩製の打製石斧1点がそれぞれ出土した。

### 奈良時代の遺物

奈良時代末期の土師器内黒の杯で、糸切り底を有したのが1点出土している。

### 中世の遺構

今回の発掘調査で中世の遺構としては住居址1軒、竪穴1基、溝状遺構1基、掘立柱建物址5棟～6棟の検出をみた。

住居址一平地式掘立柱を有する住居址である。住居址の中央部付近に焼土が鮮明にみられた。これは地床炉の形態を持ち、付近に小ピットの存在が無いことからみて、鉄鍋を利用したのであろう。

竪穴—2m 20cm × 2m 35cm位の隅丸方形形状である。床面上には等間隔で方形形状の柱穴が、壁外の周囲に柱穴が存在している。床面上の柱穴は束を置き、その上に木を並べてころぼし床状にしたものであろう。壁外の柱穴は主柱状となり、あくまでも屋根をかけたのであろう。穀粒状の炭化物の出土からみて、倉庫的に利用したのであろう。

溝状遺構一本遺構は発掘調査地区の最南端部に検出された遺構である。構築時には上から引水を利用したのであろう。その後、常に水をある程度たえていたとみて、砂の堆積が多くみられた。結論的にみて本遺構は館を取り囲く、堀を兼ねたものであったろう。

掘立柱建物址一柱穴の配列からみて、5棟～6棟の建物址の存在が認められる。ただ全てが同一時期とは速断できない。

### 中世の遺物

石器—砥石5点、石臼2点の出土があった。

陶磁器—本文の中で詳細に述べてあるのでそれを参照して下さい。

古銭一欠損品を含めて7点出土し、全てビタ銭である。内訳は咸平元宝、天聖元宝、皇宋通宝、洪武通宝であった。日本への輸入経路は日宋、日明貿易によるところが全てであったと思われる。

鉄製品—出土品は相当量あったが、そのうち主なるものは角釘、火打金、工具等である。

### 総合的な所見

発掘調査地点は陳闕渡・築跡というような中世の居館に關係したような小字名が残っている。発掘調査地域から北西へ約1km位行った山頂に春日城が存在している。これは物見の城として有名である。遺跡の所在地が高遠城と箕輪町の福与城を結ぶ交通の要所にあること。水差し、天目茶碗など茶道に関連のある出土品の多いこと。青磁等中國産の陶磁器類の出土品のこと。陳闕渡といった、関所に關係した小字名の存在していること等々を踏まえて考えてみると、通行人の監視を兼ねた地方土豪、地侍の居館跡と思われる。この居館跡の全盛期は室町中期から戦国時代と出土遺物からみて想像できる。「伊那武鑑根元記」によれば戦国時代に野口甚吉が野口地域を統治していたと記載されている。いづれにしても野口氏に關係する氏族の居館であろう。

室町初期の古瀬戸灰釉把手付水差しの出土は近くにある無量寺の阿弥陀如来との關係をも考えてみる必要が生じてきた。

(飯塚政英)

# 図 版



遺跡地を南側より眺む



遺跡地を東側より眺む



遺構配置（南側より眺む）



遺構配置（北側より眺む）



第1号住居址



第1号竪穴



第1号溝状遺構（西側から眺む）



第1号溝状遺構（東側から眺む）



第1号溝状遺構西壁断面



第1号土壤



陶器出土狀況



陶器出土狀況



陶器出土狀況



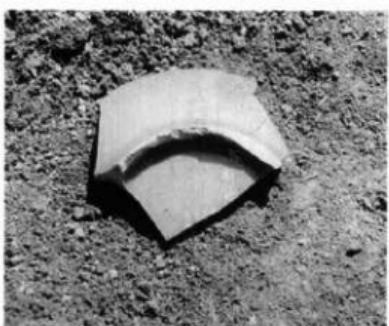
陶器出土狀況



陶器出土狀況



陶器出土狀況



磁器出土狀況



土器出土狀況



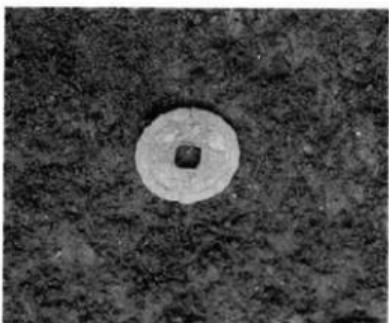
土器出土狀況



石器出土狀況



鐵製品出土狀況



古錢出土狀況

堂 垣 外 B 遺 跡



## 目 次

目 次.....	(3)
挿図目次.....	(3)
図版目次.....	(3)
表 目 次.....	(3)
 第Ⅰ章 発掘日誌.....	(4)
 第Ⅱ章 遺 構.....	(4)
第1節 住居址.....	(4)
第2節 竪 穴.....	(6)
 第Ⅲ章 遺 物.....	(6)
第1節 陶磁器.....	(6)
 第Ⅳ章 まとめ.....	(7)

### 挿図目次

第1図 第2号住居址・第2号竪穴 実測図	.....(5)
-------------------------	----------

### 図版目次

図版1 遺構
--------

### 表 目 次

第1表 出土陶磁器一覧表
--------------

.....(6)
----------

## 第Ⅰ章 発掘日誌

昭和61年8月4日 雨時々曇 雨降りだったので、午前10時頃まで、今まで使用してきた道具の整備、テント内の整理、整顿を行う。遺物を遺構ごとに分類し、整理箱に整理、保管をする。柄の抜けた道具に柄を入れる。

昭和61年8月5日 晴

第1号住居址の北側を精査していると、方形状の落ち込みが二ヵ所にわたってみられ、東側のを第2号竪穴、西側のを第2号住居址と命名する。第2号竪穴は西側で第2号住居址の周溝によって切られていた。

昭和61年8月9日 晴

・第2号住居址、第2号竪穴の掘り下げを実施する。  
相当量の室町期古瀬戸系の陶器片の出土をみた。

昭和61年8月11日 晴 第2号住居址、第2号竪穴の全掘を終了する。

昭和61年8月12日 晴 第2号住居址、第2号竪穴の清掃及び写真撮影をする。

昭和61年8月13日 晴 第2号住居址、第2号竪穴の平面及び断面実測を終了する。

昭和61年12月～昭和62年2月 図面の整理、原稿執筆、報告書の編集、それを印刷所へ送る。

昭和62年3月 報告書を刊行する。



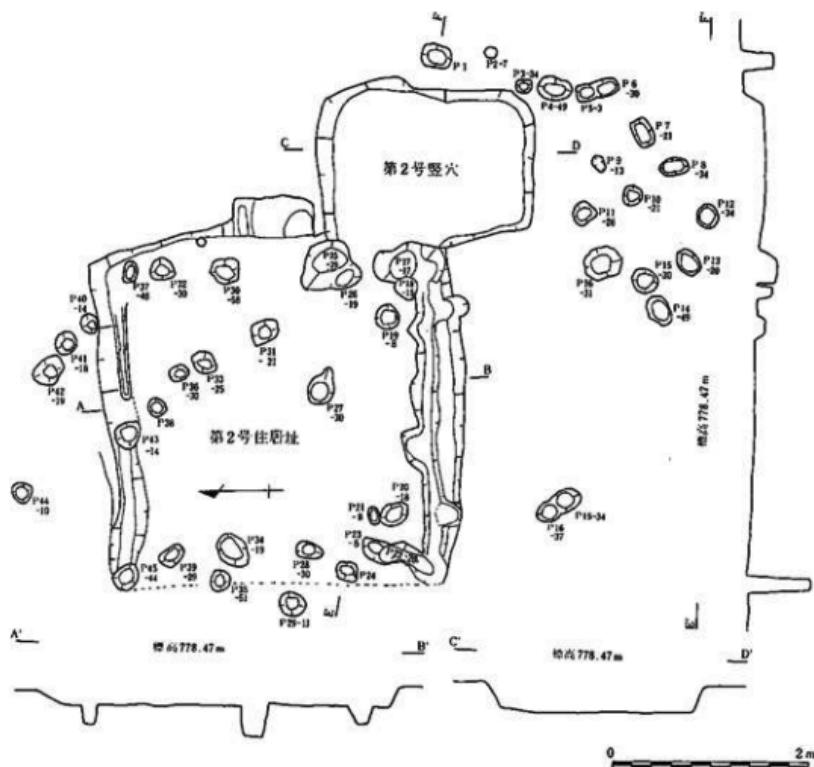
第2号住居址・第2号竪穴発掘風景

## 第Ⅱ章 遺構

### 第1節 住居址

#### 第2号住居址 (第1図、図版1)

本住居址は、今回の調査で検出された遺構群の最北端に位置し、褐色土層の下層面に発見された。覆土は黒褐色土層から成り、この層内に炭化物を少量検出した。検出遺構面までは表土面から約80cm下がった所であった。南北3m60cm位の規模で隅丸方形状を呈する竪穴住居址であった。



第1図 第2号住居址・第2号竪穴実測図

壁は20~25cm位を測り、全般的に外傾気味で、軟弱であり、ところどころに凹凸がみられる。構築地層の基盤は東から西へ傾斜しているために西壁は存在していなかった。床面は堅く、ところどころに凹凸がみられた。南壁、北壁直下には周溝がみられる。南壁直下のそれは幅広うで、やや深く、つながっている。それに反し、北壁直下のは幅が狭く、ところどころで途切れていた。南側の周溝はところどころに屈曲がみられ、北壁のは直線状に連なっていた。

南壁直下に中段がみられ、この一角は特に堅く踏みかためられていた。南東の隅で第2号竪穴をわずかのレベル差で切っている。東壁の中央部付近に小さな方形状の出張りがあり、床面の中央部に向ってやや東から西へ傾斜をしている。柱穴は数多く存在し、その配列は床面上で壁に沿っているのが、主流を成していた。

遺物は室町終末期の古瀬戸灰釉平茶碗、室町終末期の古瀬戸灰釉おろし皿、鎌倉末期の美濃系山茶碗、南北朝の古瀬戸盤が出土しているが、後の二片は柱穴址の飛び込みとみてよかろう。従って、

本遺構は室町終末期に属すると思われる。

## 第2節 穫 穴

### 第2号竪穴 (第1図、図版1)

本竪穴は北西の一隅で第2号住居址に切られている。表土層面より80cm位下ったソフトローム層面を掘り込んで構築してあり、その規模は南北2m23cm、東西1m60cm位を持ち、東壁上面は多少出張りがあるが、全般的には隅丸方形形状を呈している。壁高は25~30cm位を測り、全般的にやや内傾を呈し、東壁と南壁はやや凹凸が多い。

床面は大般平坦で、やや堅くなっていた。この竪穴を埋め尽していた覆土は黒褐色土で、この中に少量の炭化物や焼土を含んでいた。柱穴は周辺に多数存在していたが、本竪穴に附隨するかは明瞭ではない。室町中期頃の陶器片が出土している。

## 第Ⅲ章 遺 物

### 第1節 陶 磁 器

今回の調査で出土した陶磁器については下の表を一覧して下さい。第1表出土陶磁器一覧表は口絵2のカラー写真と照合して下さい。

第1表 出土陶磁器一覧表

口絵	番号	名 称・器型	部分	厚さ(%)	出土場所	製作時代	備 考
2	2	古瀬戸灰釉平茶碗	口縁部	6	第2号住居址	室町終末期	
◆	3	古瀬戸灰釉平茶碗	◆	5	◆	◆	
◆	4	美濃系山茶碗	底 部	5	◆	鎌倉末期	
◆	5	古瀬戸盤	脚 部	11	◆	南北朝	
◆	6	古瀬戸灰釉おろし皿	底 部	11	◆	室町終末期	

(飯塚政美)

## 第Ⅳ章 まとめ

大局的な結論は堂垣外遺跡の第Ⅳ章まとめで記述してあるので、ここではあくまでも簡略にまとめておくことにする。

第2号住居址—3m 60cm位の規模で隅丸方形状の竪穴住居址である。床面上に周溝の残存状態が良好である。南東の隅で第2号竪穴を切っている。柱穴の配列は壁に沿って割合に整然となっていた。

室町終末期の古瀬戸灰釉平茶碗、室町終末期の古瀬戸灰釉おろし皿の出土。

第2号竪穴—北西の一隅で第2号住居址に切られている。2m 23cm×1m 60cm位の規模で隅丸方形状、室町中期の陶器片の出土。

堂垣外B遺跡報告書作製に当っては現場に何度も来訪され、適切な助言を下さった長野県教育委員会文化課指導主事の先生方、上伊那地方事務所土地改良課職員一同、地元土地改良区役員の方々、酷暑の中で汗を流し直接作業をされた調査団の先生方、作業員の皆様方、さらに出土陶磁器を快く鑑定して下さった瀬戸市歴史民俗資料館長宮石宗広氏の各位に対し、心より感謝の意を表するものであります。

(飯塚政美)

# 図 版



第2号住居址・第2号竪穴



第2号竪穴

---

---

## 堂 垣 外 遺 跡

—緊急発掘調査報告書—

昭和62年3月17日 印刷

昭和62年3月19日 発行

発 行 長野県伊那市教育委員会

印 刷 長野県探訪部下諏訪町広瀬町  
株式会社オウエイ印刷

---

